



菅波 茂

99. 10. 21

9月5日。AMD Aインドネシア支部から岡山の本部にファックスが来た。東ティモールから西ティモールにのがれた約20万人の難民に対し、緊急医療プロジェクト支援の要請である。支部は医師6人、看護婦1人そして調整員2人の医療チーム編成で、いつでも出発できるように待機しているとのことであった。

問題は資金である。私は迷わず中桐伸五衆院議員に相談した。私の岡山大医学部剣道部の先輩だった。竹刀でお互いに脳細胞を刺激しあった間柄である。ともあれ中桐先輩はトルコ大地震の時に「AMD Aの一医師」として救援チ

ムに参加してくれた。「国会議員たるもの危機最前線に身を置き、しかる後に政策を考えるべし」という信念からであっ

た。

東ティモール難民支援

中桐先輩はこの東ティモール難民救援プロジェクトの統括責任者を引き受けてくれた。さっそく連合および自治労にすぐ連絡をとり、派遣資金お願いのため上京した。両者とも私たちの救援チーム派遣の意義を気持ちよく理解し、合計500万円の資金提供を決定してくれた。

9月17日、インドネシアチーム活動開始。21日、このチームを支援すべく医師2人、看護婦1人そして調整員1人の日本チームを派

遣した。難民キャンプは私たちの医療チームを大歓迎してくれた。疾患としては呼吸器疾患、下痢、マラリアが多かった。チームは1日100〜200人にも及ぶ患者を診察した。

東ティモールに多国籍軍が入り治安は徐々に回復している。一方私たちの活動している西ティモールに自衛隊の調査団が入った。自衛隊とも協力しながら、機会があれば東ティモールにも医療チームを派遣する予定である。ベトナム、ネパール、バングラデシュ、そしてその他の支部からも参加するAMD A多国籍医師団として。

「必要とされればどこへでも行く」。これがAMD Aの普遍的行動原則である。

(アジア医師連絡協議会代表、題字は筆者)